

京都の町家の外観における木格子とそのイメージ

増田 稔・山本 留美子・佐道 健

Psychological Images and Existing Rates of Wooden Grilles in Exterior of
MACHIYA or Traditional Town-Houses in Kyoto

Minoru MASUDA, Rumiko YAMAMOTO and Takeshi SADOH

要 旨

祇園祭りの山鉾で知られるいわゆる鉾町地域を対象に、伝統的な木格子がどの程度残っているかを調査した。ビル化など建て替えが進み、切り子格子や千本格子、仕舞多屋（しもたや）格子といった伝統的な京町家の木格子は少なくなっており、木格子の多く残っている通りで14%（軒数比）、少ない通りで3%、平均すると10軒に1軒もない状況にある。

格子や窓周りの外観及び一階全面の外観のイメージ調査を写真を用いて行い、その結果、伝統的な木格子は「京都らしい」イメージを強く与えること、また、アルミなどの金属製の格子では、たとえ色彩がダークブラウンであっても「京都らしさ」のイメージは非常に低いこと等が明らかとなった。

1. 緒 言

木材は燃えるという観点から、建物の外面に木材が露出することを建築基準法は強く規制している。特に建物の密集する市街地は準防火地域に指定されていることが多く、その地域においては、木造建築物の外壁及び軒裏（延焼のおそれのある部分）は防火構造としなければならない。京都の市街地はほとんどが準防火地域であり、この規制の対象となる。現存する建物そのものはこの規制を受けないが、老朽化による建て替えを行おうとすると、木材が表面に出ている従来通りの町家を建てることは出来ない。もし建てる場合には例えば隣地境界線から平屋で3m、二階建てで5m 隔てなければならない。間口の狭い京町家ではこれは困難である。このように伝統的町家の建て替えが防火規制上困難であることのほか、住人の転出、職種変更、相続に伴う税金等の理由で家を売却せざるを得ない場合もあり、その跡地にビルや駐車場ができる場合も少なくないであろう。このような理由から伝統的京町家は減少の一途をたどっているものと考えられる。

本研究では、調査の一例として、祇園祭りの山鉾で有名な鉾町付近を対象とし、木格子及びその他の格子・窓棧の現状を調査した。さらにまた、このとき撮影した映像を用いて、木格子のもつ「京都らしさ」のイメージなどをアンケート調査した。

2. 木格子の残存率

2.1 調査方法

今回調査した地域は、Fig. 1 に示すように東は烏丸通から西は油小路まで、北は姉小路から南

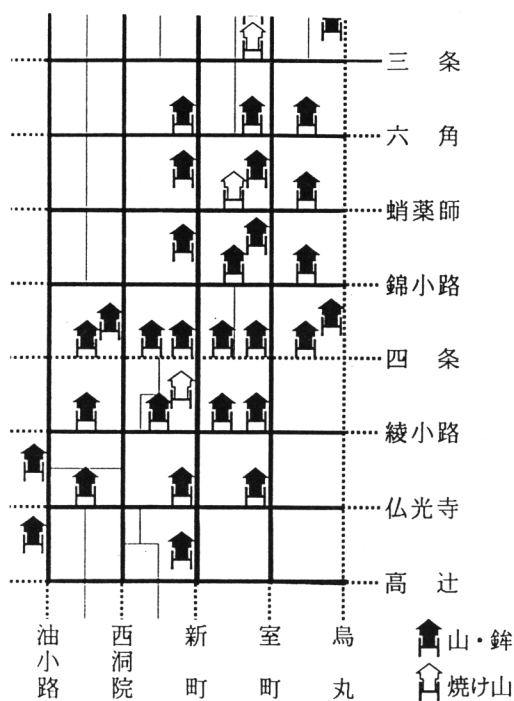


Fig. 1 調査対象地域（鉾町地区）の概念図
太実線の通りを調査対象とした。

ため、全軒数に対する割合（％）で示した。

いわゆる京町家の典型的な木格子の残存率は、町並みの見た目のイメージより少なく、いずれの通りも14%以下であった。三条通は店舗が多く、調査対象としなかった烏丸通や四条通と同様

は高辻通までの鉾町地域とその近辺であり、東西8通り（四条通を除く）、南北4通り（烏丸通を除く）に面した家々を調査した。

市街地詳細地図を参考に調査事項を現地で記入するとともに8ミリビデオカメラ（ソニー、ハンディカム CCD-TR1000、ワイドコンバージョンレンズ併用）を用いて各建物の正面像を順次収録した。研究室においてこの映像をモニター上に再現し、木格子の種類と軒数等の集計を各通り毎に行った。現地調査は1993年7月21日～8月29日の間の晴れまたは曇りの10日間、午前6時半～8時前後に行った。

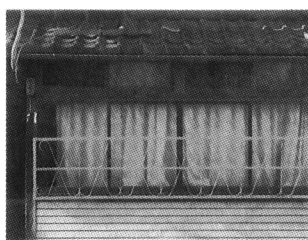
2.2 調査結果及び考察

2.2.1 通りに面した格子・窓の形態

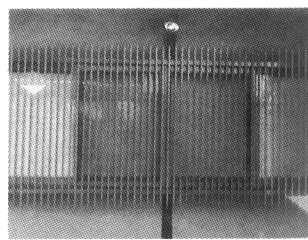
通りに面した格子・窓の形態を、木格子、竹格子、鉄丸格子、アルミサッシ格子、その他の金属製窓棧に大まかに分けて (Fig. 2) 集計した結果を Table 1 に示す。ここでは東西の通りと南北の通りの比較を容易にする



木製格子



鋼製格子



アルミ製格子

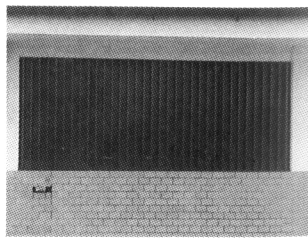
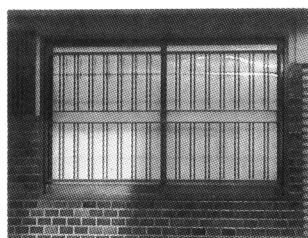
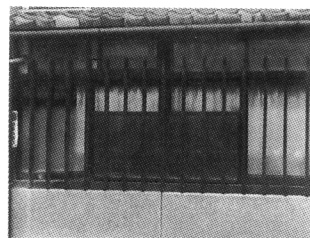


Fig. 2 木製格子、金属製格子の例

Table 1 鉾町地区における通りに面した窓の形態 (%)

通 り 名		全 軒 数 (戸)	木 格 子	竹 格 子	丸 鉄 棒 格 子	鋼製格子	アルミ製 格 子	格子合計 (%)
東 西 の 通 り	姉 小 路	113	10	1	4	3	10	28
	三 条	129	3	2	2	6	2	15
	六 角	116	11	0	4	6	9	30
	蛸 薬 師	116	14	1	9	3	2	29
	錦 小 路	107	12	0	4	5	7	28
	綾 小 路	116	12	0	3	4	9	28
	仏 光	121	9	0	9	6	6	30
	高 辻	97	6	0	1	6	9	22
南 北 の 通 り	室 町	191	5	0	4	5	3	17
	新 町	263	11	*	7	8	7	33
	西 洞 院	285	4	0	2	6	4	16
	油 小 路	258	12	0	5	7	4	28
合計あるいは平均%		1912	8.8	0.3	4.5	5.8	5.2	24.6

* : 1 軒

通りに面した建物の一階を対象とし、ビルや建物が道路に面していない（空地や駐車場）場合は除いた。また、格子のない単なる窓も除いた。（ただし、これらは全軒数にはカウントされている）。

ビル化が進み、格子による和風イメージが商店のイメージに効果的な役割を演じることを除けばほとんど残っていない状況にある。全般的に、道幅が広く店舗の多い通りほど、木格子の残存率は低い傾向にある。

なお、集計対象にはマンションやビルなどの大型建築物の窓は除き、かつ一階部分がガラス窓のみで格子のないもの、駐車場や駐車スペースが道路に面し建物が道路から離れているものは含まれていない（ただし、いずれも全戸数には数えられている）。従って、各通りの集計対象となった窓・格子の割合は姉小路、六角、蛸薬師、錦小路、綾小路、仏小路、新町、油小路の8つの通りで30%前後であるのに対し、高辻で22%、三条、室町、西洞院では15~17%であった。数値の低い通りほどビル化が進んでいる傾向が見られる。

2.2.2 木格子の種類毎の残存数

Fig. 3 に代表的な例を示すように、格子の太さや長さの組み合わせ等により木格子には種々の種類があり、かつては多様な職商の名を冠した格子があったことが知られている¹⁾。

糸屋格子は意匠形式上は親子格子（親子切り子格子）であるが、切り子4本は織屋、3本は糸屋、2本は呉服屋といふように関連職種によって格子を変えたといわれている。本研究では木格子の種類を大まかに分類して通り毎の個数を集計し、Table 2 に示した。表中の数はほぼ戸数に近いが種類の異なる木格子が一軒に複数個存在する場合にはその数を数えた。

この地域には呉服屋、生地卸、染織など、繊維関係の商が多く、前述のようにこれらの職業に対応した切り子格子が多く見られる。また連子格子も多く見られ、その中には、仕舞多屋（しもたや）格子とともに京格子の代表的存在である堅子の細い千本格子（細目格子）が比較的多く残っている。これらの京格子は出窓風に前に張り出した出格子になっている場合が多く、しかも戸口は大きめの戸（おおど）、二階には虫籠（むしこ）窓のある典型的な伝統的京町家に多く見られる。

切り子格子、千本格子、仕舞多屋格子に比較して、江市屋格子は数が少なく、目板格子、狐格子、眠格子に至っては稀にしか見られなかった。

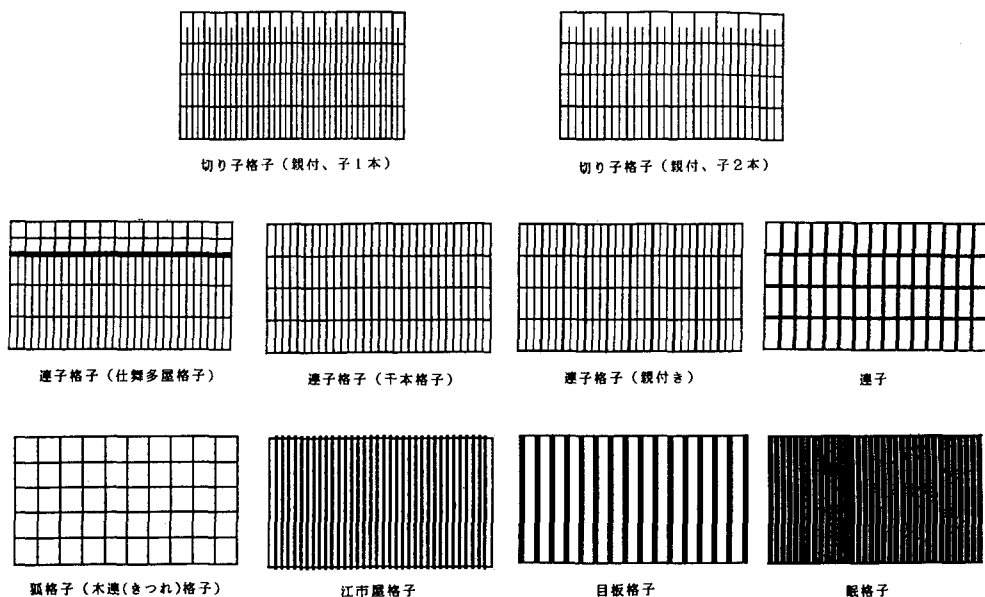
Fig. 3 伝統的木格子の模式図^{1),2)}

Table 2 鉾町地区における伝統的木格子の分類 (個数)

通 り 名		切り子	連 子 (仕舞多厘)	連 子 (その他)	狐	江市屋	眠	目 板	その他	合 計
東 西 の 通 り	姉 小 路	4	2	0	0	1	0	0	1(1)	8(1)
	三 条	4(1)	0	1	0	0	0	0	1(1)	6(2)
	六 角	5	0	5	0	0	0	1	1	12
	蛸 薬 師	6	1	3	0	1	0	0	5(1)	16(1)
	錦 小 路	4	0	3	0	1	0	0	1	9
	綾 小 路	4	11	1	1	0	0	0	0	17
	仏 光 寺 辻	5	5	1	0	0	0	1	2	14
南 北 の 通 り	高	2	1	0	0	0	0	0	1	4
	室 町	5	2	1	0	0	1	0	2	11
	新 町	12	6	4	0	2	0	1	7(1)	32(1)
	西 洞 院 路	3	3	3	0	1	0	0	2	12
合 計		21	4	4	0	1	0	0	5	35
合 計		75(1)	35	26	1	7	1	3	28(4)	176(5)

() 内の数字は竹格子の数 (内数)。

通りに面した建物の一階部分の窓を対象とし、一軒に2種類の格子がある場合はそれぞれの項でカウントされている。

3. 木格子のもつイメージの写真による調査

京都では緒言で述べたような理由から木格子が年々少なくなりつつある。いったいこのままでよいのだろうか。それにしても木格子はどのようなイメージを人々に与えているのだろうか。このような疑問を明らかにするひとつの方法として本研究では建物の外観の写真を用いたアンケート調査を行った。

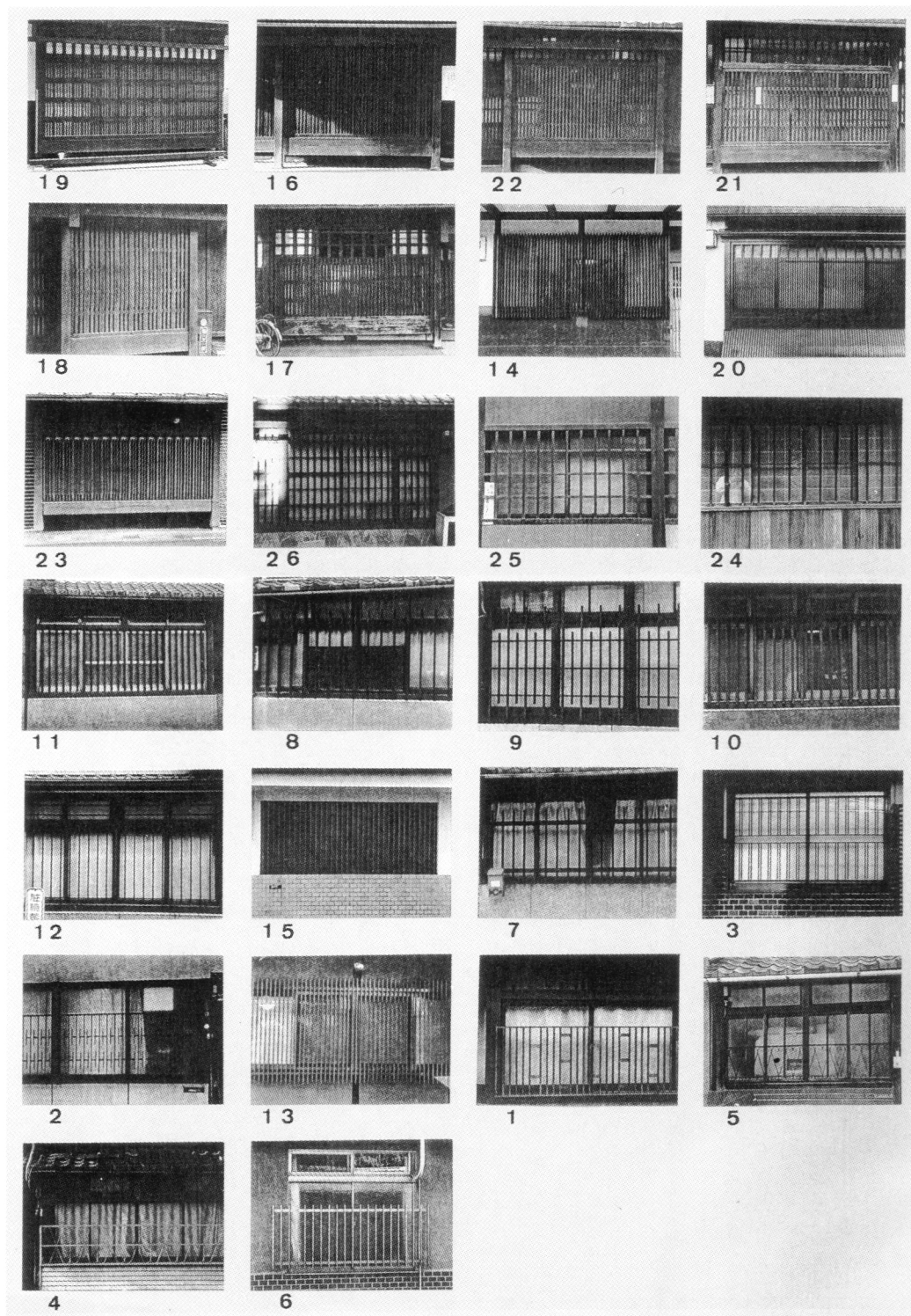


Fig. 4 「京都らしい」イメージの順 (Aシリーズ)
左上から右, 上段から下段へ。最下位は最下段の6。

3.1 アンケート方法

木格子の残存数の調査時に収録した窓周りの一階部分の映像（Aシリーズ）及び一階の全面の写っている映像（Bシリーズ）の代表的なものをビデオ・カラー・プリンタ（三菱SCT-CP1000）を用いて68mm×90mmにプリントし、Aシリーズでは26枚（Fig. 4）、Bシリーズ（Fig. 8）では19枚を選び出し、見た目のイメージ調査を行った。アンケートに用いた言葉はAシリーズでは「京都らしい」「安価な」「頑丈な」であり、Bシリーズでは「京都らしい」「落ちつきのない」「感じのよい」であった。それぞれのシリーズごとに各言葉のイメージにふさわしいと思われる順にカラープリントを木製の製図板の上に並べてもらい、その写真番号の順序を記入してもらった。被験者は男子20名、女子20名の京都大学学生（ただし女子の内1名は社会人）であった。「高価な」や「落ちつきのある」と言った言葉を用いずに「安価な」や「落ちつきのない」を用いたのは、似た傾向にある言葉が並ぶことによる回答の惰性（無意識に似た並べ方をする）を防止するためである。

アンケート結果の集計には、まず各人について各言葉ごとに1位を100点、最下位を0点として100点満点換算したイメージ得点を求め、これを集計するとともに、提示写真ごとの回答者によるイメージの変動も求めた。これらを基にさらに集計結果に標準

Table 3 格子・窓周りの外観のイメージ

<Aシリーズ>

No	京都らしい		安 価 な		頑 丈 な	
	I	II	I	II	I	II
1	-2.15	18.4(14.1)	1.61	78.2(15.6)	-0.88	29.2(16.7)
2	-1.95	21.3(12.7)	1.62	78.3(14.5)	-1.19	22.0(21.9)
3	-1.59	26.7(18.1)	0.41	57.2(23.1)	-0.24	44.4(27.8)
4	-2.46	13.9(15.1)	2.21	88.8(16.9)	-1.53	14.0(18.2)
5	-2.29	16.3(13.8)	2.08	86.5(16.8)	-1.46	15.6(21.1)
6	-2.96	6.5(9.4)	2.25	89.4(15.3)	-0.61	35.6(26.5)
7	-1.12	33.5(12.6)	1.27	72.2(17.0)	-0.47	38.9(22.1)
8	-0.27	46.1(12.1)	0.50	58.8(17.0)	0.11	52.6(22.3)
9	-0.33	45.1(10.9)	0.48	58.4(15.0)	-0.54	37.2(23.4)
10	-0.49	42.8(14.8)	0.45	57.8(17.7)	-0.27	43.7(19.8)
11	-0.22	46.8(17.3)	0.07	51.3(18.3)	0.41	59.6(17.9)
12	-0.71	39.6(16.9)	0.46	58.0(18.5)	-0.28	43.3(21.6)
13	-2.12	18.9(15.7)	0.67	61.7(26.0)	0.48	61.3(27.9)
14	1.42	70.9(15.3)	-1.20	29.0(19.3)	0.52	62.3(21.1)
15	-0.79	38.4(24.8)	-0.75	36.9(22.2)	1.12	76.3(23.6)
16	2.67	89.2(7.7)	-1.90	16.8(15.2)	1.01	73.8(28.8)
17	2.09	80.7(10.9)	-1.14	30.1(17.8)	0.50	61.9(28.4)
18	2.11	81.0(10.1)	-1.36	26.2(13.9)	0.86	70.2(28.9)
19	2.75	90.4(9.4)	-2.27	10.2(12.4)	0.89	71.0(24.1)
20	1.40	70.6(28.8)	-1.61	21.8(24.6)	0.62	64.5(27.2)
21	2.29	83.7(9.3)	-1.69	20.4(12.5)	0.46	60.8(26.8)
22	2.52	87.0(10.1)	-1.85	17.6(14.8)	0.80	68.8(24.6)
23	1.28	68.8(23.9)	-1.34	26.5(22.0)	0.78	68.5(22.5)
24	-0.18	47.4(19.7)	1.15	70.2(19.7)	-1.26	20.3(23.2)
25	0.14	52.0(16.4)	0.75	63.1(16.9)	-0.28	43.5(27.2)
26	0.95	64.0(12.1)	-0.88	34.6(12.4)	0.45	60.7(19.4)
平均	0.00	50.0(14.7)	0.00	50.0(17.5)	0.00	50.0(23.6)

I：基準化イメージ得点（平均＝0.00，標準偏差＝1.00）

II：相対イメージ得点（100点満点，平均＝50.0）

（ ）内の数字は標準偏差（被験者によるばらつき）を表わす。

によるイメージの変動も求めた。これらを基にさらに集計結果に標準化処理（平均値を引いて標準偏差で割る，すなわち平均値0，標準偏差1となる）を行ない，基準化イメージ得点も求めた。

3.2 格子・窓周りの外観のイメージに関するアンケート結果（Aシリーズ）

アンケート結果をTable 3に示す。また、Fig. 4にはアンケートに用いた写真を「京都らしい」イメージの順に並べて示した。

親付切り子格子や千本格子の仕舞多屋格子、江市屋格子といったいわゆる伝統的木格子は「京都らしい」イメージを強く与え、なかでも軒高いっぱい縦方向に格子が通っていて、しかも出格子でかつ格子間隔が密なもののほど、「京都らしい」イメージをより強く与えた。間隔が広く本数の少ない木格子では「京都らしさ」のイメージは低くなるが、鉄やアルミニウムの金属格子や窓枠はこれらよりさらに「京都らしさ」のイメージを低くした。

このことは、「京都らしい」と「安価な」イメージの関係を、木格子と金属格子に記号を分けてプロットした Fig. 5 を見るとよく分かる。木格子のプロットの並びは金属格子のプロットの並びに比べて上側すなわち「京都らしさ」のイメージ側にずれており、木格子の方が金属格子よりも「京都らしい」イメージをより強く与えることが読みとれる。

「京都らしい」のイメージで0付近、「安価な」イメージで+の位置にプロットのある木質の格子 (No. 7~11, 24, 25) は、いわゆる伝統的町家の木格子ではなく、戦前戦後あたりに造られた粗い間隔の木製の窓格子である。伝統的木格子が親子合わせて一面で40~60本の格子をもってのに対して、これらは12~26本と本数が少ない。また、伝統的木格子が床から軒までの高さ(180cm程度)があるのに対して、これらの窓格子は1m付近から上の窓部分のみ、すなわち120cm程度の高さ寸法しかない。

Fig. 6 の「京都らしい」と「頑丈な」イメージについて、木格子のみに注目すると、前述のように間隔が密なものが「京都らしく」また「頑丈な」イメージを与えることから、両者の相関の高いことが容易に理解できる。

Fig. 7 に「頑丈な」と「安価な」の関係を示す。負の相関すなわち、頑丈なものは安価ではないという傾向が見られるが、金属製のものには、頑丈な割に高価に見えないものがいくつか見られる。木製格子で本数の少ないもの、すなわち伝統的な格子でないものや金属製の細いものは「頑丈な」イメージを与えない。細くても吹き寄せ(2本または数本ずつ間隔を詰めて一組とし、その組と組とは間隔をあける)にした

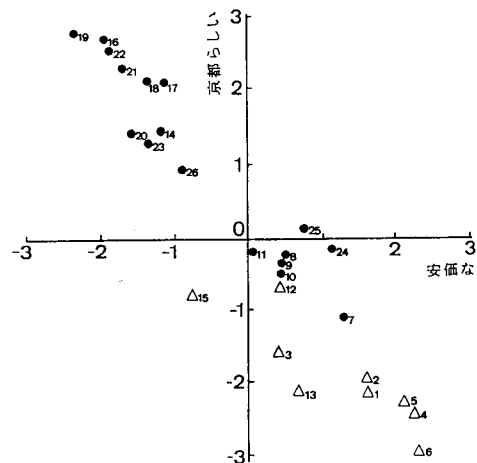


Fig. 5 「京都らしい」と「安価な」の関係 (Aシリーズ)

●：木格子，△：金属格子
相関係数：-0.93，図中の数字は Fig. 4 参照。

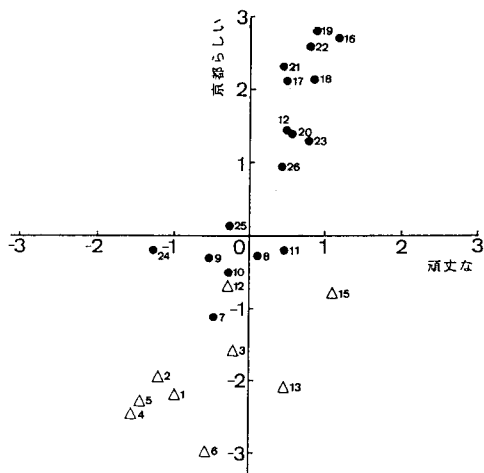


Fig. 6 「京都らしい」と「頑丈な」の関係 (Aシリーズ)

●：木格子，△：金属格子
相関係数：0.75，図中の数字は Fig. 4 参照。

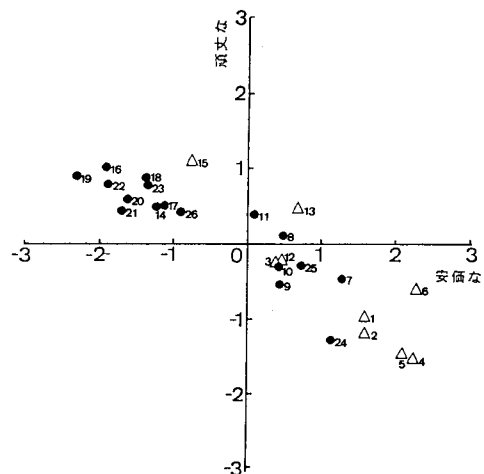


Fig. 7 「頑丈な」と「安価な」の関係 (Aシリーズ)

●：木格子，△：金属格子
相関係数：-0.90，図中の数字は Fig. 4 参照。

金属製格子 (No.3) は、細さの割には「頑丈な」イメージを与えている。

3.3 一階部分の外観のイメージに関するアンケート結果 (Bシリーズ)

Bシリーズのアンケート結果を Table 4 に示した。また、Fig. 8 にアンケートに用いた写真を「京都らしい」イメージの順に並べて示した。Aシリーズでは対象を格子・窓に限定したのに対しBシリーズでは戸口を含む一軒分の間口が写っている。

Aシリーズと同様、伝統的木格子のある建物 (No.11~14) が「京都らしい」の上位を占めている。ファサードに出格子を残しその横の玄関部分にはブラウン色の金属格子シャッターを備えた、伝統的形式と現代的機能性を兼ね備えた建物 (No.15) が伝統的木格子の次のランクに位置している。この建物のすぐ後ろに鉄筋コンクリート造の建物がつながっており、今後の町並み保存のひ

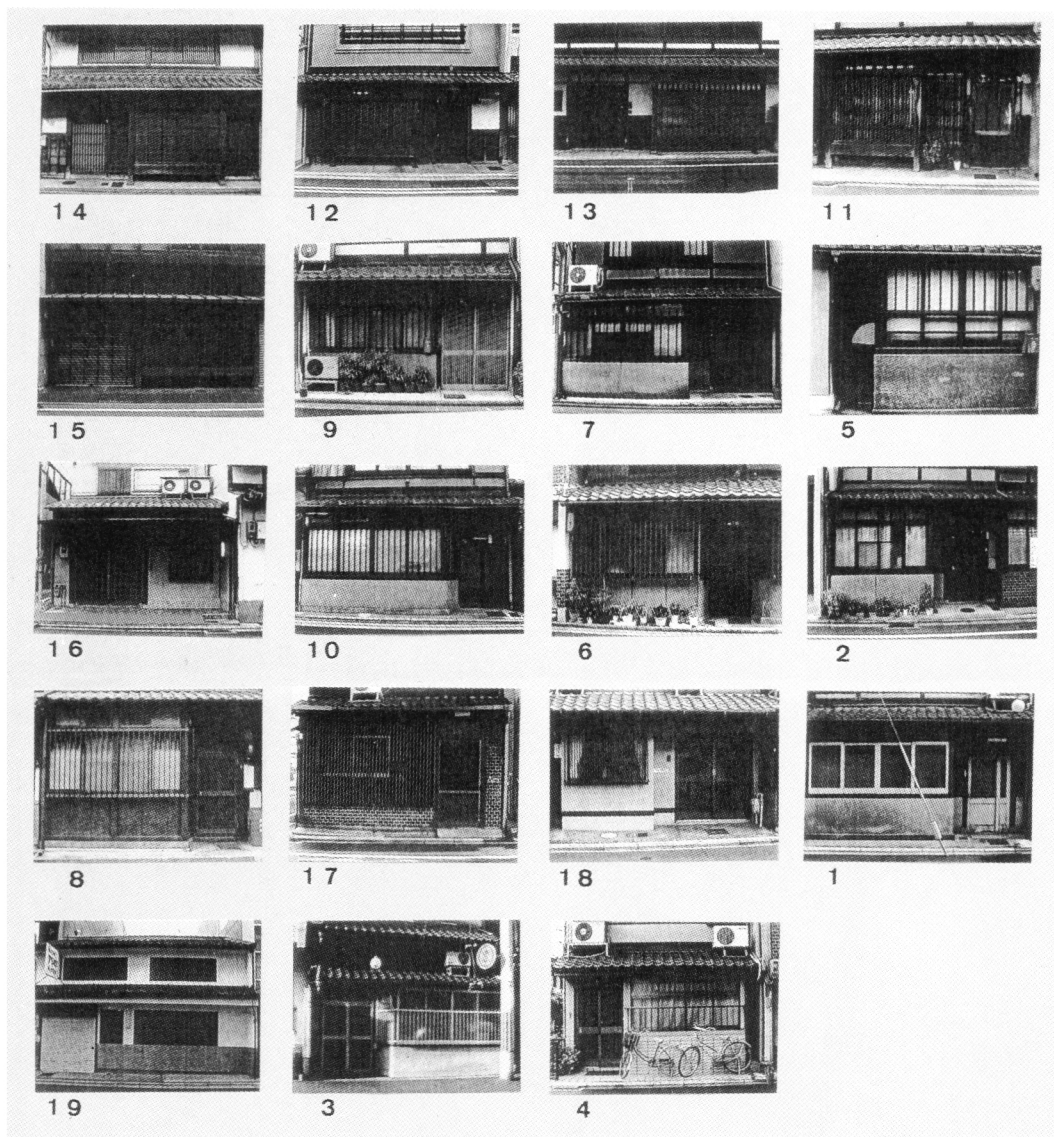


Fig. 8 「京都らしい」イメージの順 (Bシリーズ)
左上から右へ、上段から下段へ。最下位は最下段の4。

とつの選択例を示唆する建物と考えられる。

「京都らしい」と「落ちつきのない」イメージの間には高い負の相関が存在し、Fig. 9 に示すように伝統的な木格子のある建物は「京都らしく」「落ちつきのあ」イメージをもつ。これに対して、15～30cm間隔に縦に木製格子の走るガラス窓と木格子の玄関を組み合わせた建物 (No. 5, 7, 9, 10, 16) は原点付近にプロットされており、特に「京都らしく」もなく、特に「落ちつきがある」わけでもないといった評価を受けている。

Fig. 9 に三角印で示されているようにアルミサッシの窓や玄関、アルミの窓格子は、たとえ色彩がブラウンであっても「京都らしさ」のイメージは低い。木材の持つ質感が重要であることがわかる。

No.19は京都のイメージを少し気にして設計されたと思われる新しい建物であるが、この建物に対する「京都らしい」イメージの個人差は大きく、また平均値も低い。必ずしも設計の意図が成功しているとは言い難く、今後の設計において留意すべき点であると考えられる。

No.1は、木製の肌色のペイント塗の太い窓枠と戸があり、色彩的にも形状的にも好ましいイメージを与えていない。ただ単に木製であればよいイメージを与えるといったものではないことを示す典型的な例である。

Fig. 10 及び11に「京都らしい」と「感じのよい」、「感じのよい」と「落ちつきのない」の関係を示した。前者には正の相関 ($r=0.96$)、後者には負の相関 ($r=-0.92$) が認められるが、「感じのよい」は強い evaluation を伴う言葉であり、評価に個人差が大きいため互いに打ち消し合ってイメージ得点の幅 ($-1.31 \sim 1.24$) も、他の言葉に比して小さい。

Table 4 一階部分の外観のイメージ

〈Bシリーズ〉

No.	京都らしい		落ちつきのない		感じのよい	
	I	II	I	II	I	II
1	-1.28	27.2(21.5)	1.27	75.0(19.6)	-1.28	19.0(27.6)
2	-0.77	36.3(20.2)	0.37	57.2(22.8)	0.06	51.5(26.2)
3	-2.00	14.4(16.2)	1.72	83.9(14.6)	-1.31	18.3(19.7)
4	-2.19	11.0(20.3)	1.76	84.7(19.3)	-0.58	36.0(28.9)
5	0.29	55.1(18.8)	0.28	55.6(25.5)	-0.51	37.8(28.7)
6	-0.66	38.2(18.9)	0.35	56.8(25.2)	-0.08	48.1(21.3)
7	0.37	56.5(14.7)	0.20	54.0(21.5)	-0.14	46.5(20.0)
8	-0.90	33.9(18.6)	1.13	72.4(17.8)	-0.57	36.3(21.8)
9	0.37	56.5(20.8)	-0.34	43.3(20.1)	0.66	66.0(23.5)
10	0.07	51.3(14.3)	0.09	51.8(15.2)	-0.22	44.6(19.2)
11	1.78	81.8(15.9)	-1.58	18.9(14.1)	1.12	76.9(17.4)
12	2.14	88.1(12.9)	-1.94	11.7(8.5)	1.08	76.1(24.1)
13	2.00	85.6(11.0)	-1.79	14.7(15.4)	1.23	79.7(23.4)
14	2.35	91.9(10.7)	-2.03	10.0(9.8)	1.24	79.9(20.4)
15	1.51	76.9(20.7)	-1.13	27.8(25.6)	0.14	53.3(29.3)
16	0.28	55.0(22.2)	0.18	53.5(27.3)	0.24	55.8(29.6)
17	-0.94	33.2(20.6)	0.81	66.0(21.7)	-0.76	31.7(21.1)
18	-1.13	29.9(16.0)	0.15	52.9(21.6)	0.07	51.7(23.4)
19	-1.28	27.2(24.3)	0.50	59.9(29.0)	-0.38	40.8(33.2)
平均	0.00	50.0(17.8)	0.00	50.0(19.7)	0.00	50.0(24.1)

I : 基準化イメージ得点 (平均=0.00, 標準偏差=1.00)

II : 相対イメージ得点 (100点満点, 平均=50.0)

() 内の数字は標準偏差 (被験者によるばらつき) を表わす。

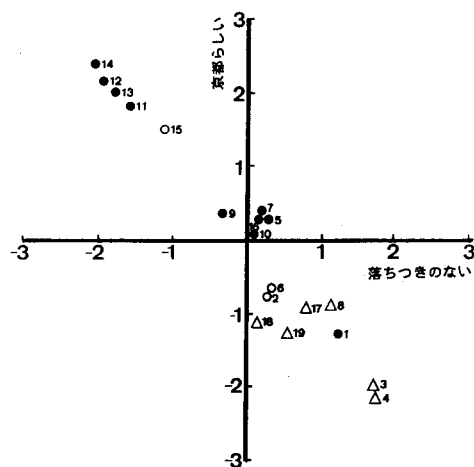


Fig. 9 「京都らしい」と「落ちつきのない」の関係 (Bシリーズ)

● : 木製 (窓周り, 戸口),

○ : 木製及び金属製混在, △ : 金属製

相関係数: -0.96 , 図中の数字は Fig. 8 参照。

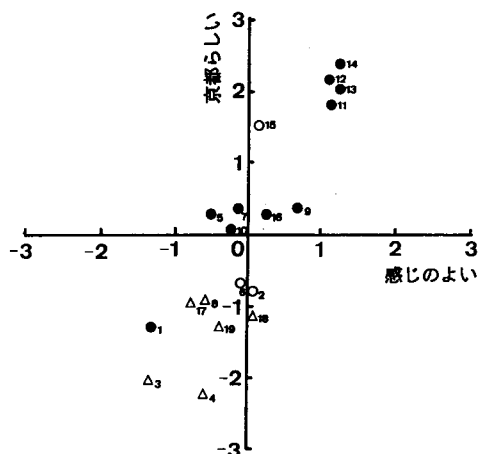


Fig. 10 「京都らしい」と「感じのよい」の関係
(Bシリーズ)

●：木製（窓周り，戸口），
○：木製及び金属製混在，△：金属製
相関係数：0.86，図中の数字は Fig. 8 参照。

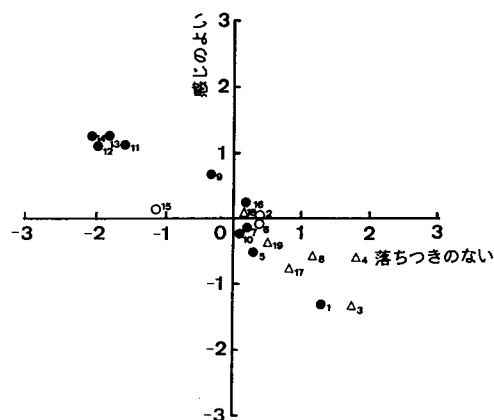


Fig. 11 「感じのよい」と「落ちつきのない」の関係
(Bシリーズ)

●：木製（窓周り，戸口），
○：木製及び金属製混在，△：金属製
相関係数：-0.92，図中の数字は Fig. 8 参照。

4. 結 言

京都の市街地において木格子のある町家が減りつつあると言われているが現在いったいどれ位の割合で残っているのか、祇園祭の鉾町近辺を対象に調査を行い、多い通りで14%、少ない通りで3～5%（三条通，高辻通，西洞院通，室町通）という結果を得た。一般に，道幅の広い通りほどビル化が進み木格子は少なくなってゆく。その典型が四条通と烏丸通である。残っている格子の種類はその地域の職種に大きく影響されるが，鉾町では切り子格子，千本格子，仕舞多屋格子が多く見られ，江市屋格子がそれに次ぎ，目板格子，狐格子，眠格子は稀であった。

木格子や窓周りの外観及び一階部分全面の外観のイメージについてアンケート調査を行い，伝統的木格子が「京都らしい」イメージを強く与えること，金属製の格子では色彩がダークブラウンであっても「京都らしい」イメージが非常に低いことを明らかにした。

市街地において「京都らしい」町家の雰囲気を保とうとすると，木格子を残すことは不可欠のことであることが今回のアンケート調査で明らかとなったが，現実問題として，これを残そうとすると，その住人に大きな負担を強いることになる。特に全く新しく建て替えると防火規制を受けるため，部分改修しつつ日常の利便を確保してゆく必要があり，その改修費用や老朽化したところの補修費用は通常の住宅よりかなり高くつくであろう。行政の援助が望まれるところである³⁾。また，平成4年6月に建築基準法3条2項が改正され，地方公共団体が指定した文化財等に建築基準法適用除外の道が開かれており，市の条例制定などにより，京町家の木格子を残し易くする方向へもってゆくことも考えられる。さらにまた，視点を変えて，木格子にセラミック木材⁴⁾もしくは難燃化処理木材を使うことも考えられよう。この場合も，このような木格子を用いた家が防火構造であると認定されるには，かなり面倒な手続きが必要であり，個別に認定を受けるのは現実的には不可能に近く，認定を容易にする何らかの行政的援助が望まれる。

今回調査をしてみて，町並の見た目の印象以上に伝統的京町家の数が少ないのには驚いた。も

っと残っているような印象を受けたが、数えてみると平均して10軒に1軒以下しか残っていないのである。逆に言うと、京町家の存在は個々の見た目のイメージが強く、10軒に1軒であっても町並みの景観の中に何軒かは見え、それなりに残っているという雰囲気を与えるのであろう。そうは言ってももうこれ以上少なくなっては京都の町から「京都らしさ」が消えてゆくだろう。地域をいくつかに限って、町並をそっくり残すことも町並保存のひとつの方法ではあるが、そのみでよいのかどうか。住民、行政ともども真剣に考えるべき時期に至っていると思われる。

最後に、この研究を行うにあたり、市街地でのビデオ撮影と調査に協力いただいた山本とよ子氏、アンケート調査に協力いただいた仲村匡司助手並びに被験者各位に対し心より感謝の意を表します。

文 献

- 1) 日向 進 (1988) 物語ものの建築史「窓のはなし」. 鹿島出版会. 88-111
- 2) 川島宙次 (1986) 民家のデザイン. 相模書房. 56-60
- 3) 尹 孝鎮, 三村浩史, リムボン (1993) 京都の歴史的都心地区における町家居住者・営業者の町家維持と継承意向に関する研究. 日本建築学会計画系論文報告集. No.453. 105-111
- 4) 西本孝一 (1988) 木材新時代. 土井恭次編. 全国林業改良普及協会. 15-22

Summary

Machiya or traditional town-houses with wooden grilles were gradually diminished in Kyoto. In this study the number of Machiya remained in Hoko-machi region was investigated, which is famous for the owner region of Hoko or decorated floats of Gion Festival. Outside views of houses on the twelve streets in Hoko-machi region (eight streets run through from east to west and four streets run through from south to north) were investigated, and counted up the number of traditional Machiya wooden houses and also the types of the traditional wooden grilles remained.

In Hoko-machi, traditional Machiya houses with wooden grilles were remained in three to fourteen percent of whole houses on the streets. In general, the wider the street is, or the stronger the commercial activity is, the fewer the traditional Machiya houses remains.

To make it clear the effect of the wooden grilles on the psychological image of houses, questionnaires using photos of various outside views of houses were distributed. The result was that metal grilles do not give "Kyoto-like" image, even if color of the surface was dark brown.

This result suggests that texture of wood is essential for "Kyoto-like" or traditional image. To keep "Kyoto-like" image on the streets in Kyoto, a public body should support the inhabitants of Machiya to bear extra economical pressure for maintaining the wooden grilles.